

Movie Review 83 #火星の女王

『#火星の女王』（2025年）をNHK総合で視聴した。原作は『火星の女王』（小川哲著）で、視聴後に併せて読んでみた。NHKの放送100年プロジェクトの一環として制作された。著者は東京大学院在学中、数学者・論理学者のアラン・チューリングについて研究した。カンボジアの現代史を絡めたSF小説『ゲームの王国』で日本SF大賞、山本周五郎賞「を受賞。『地図と拳』で山田風太郎賞、直木三十五賞を受賞。

私はSFが苦手である。それなのに興味本位で4時間半も視聴してしまった。ドラマでは、スリ・リン、菅田将暉、シム・ウンギョン、宮沢りえ、吉岡秀隆など、実力派が揃う。小説版は4人の視点が切り替わる構造になっている。

舞台は100年後の人類が移住した火星（人類が火星に移住し40年が経った2125年）。イーロン・マスクが今進めている事業が、100年後には実現したことになっている。

謎の物体「スピラミン」の発見を契機に、火星と地球の対立、そして火星生まれの盲目の女性Lと地球の惑星間宇宙開発機構（ISDA）職員Aの運命的な恋愛が描かれる。Lは地球への観光を夢見ており、Aとの約束を胸に地球帰還計画に参加しようとする。生物学者Kは火星で「スピラミン」という物質が光速を超えて情報を伝達する可能性を発見した。Aは22年前に地球で行方不明になった物体を探すよう命じられている。火星はISDAの統治下にあるが、地球への依存と不平等な取引、そして「地球帰還計画」への不満が高まっていた。

そんな中、Lは地球へ向かう直前に拉致される。「スピラミン」の発見と、その物質を巡る地球・火星間の政治的駆け引き、そしてLとAの純粋な愛が、人類の未来を揺るがすことにある。ISDAの統治下で揺れる火星社会と、両惑星の人々の欲望と希望が交錯する物語となっている。

この番組は、私の感想とは乖離があり、世間の評価は非常に高いようだ。

1. “未来SF”でありながら、物語の核は人間の感情と葛藤

舞台は2125年・火星移住40年後という壮大な設定なのに、描かれるのはとても“人間的な揺らぎ”。

- ・視覚障害を持つLの不安と希望
- ・地球と火星の間で揺れるAの葛藤
- ・支配する側・される側の緊張
- ・「未知の物体」を前にした人間の恐れと欲望

2. 視覚障害の主人公という挑戦

主人公 L は生まれつき視覚障害を持つ人物。ドラマでも、音、振動、空気の変化など、視覚以外の感覚を丁寧に表現していて、視点の新しさが際立つ。

3. 火星社会のリアリティと政治性

火星には 10 万人が移住し、ISDA が支配する構造。

地球出身者が権力を握り、火星生まれの住民は不満を抱える。

この「植民地的構造」が物語の背景にあり、社会的テーマが濃い。

- 支配と反発、格差、アイデンティティ、科学と権力等のテーマが、“社会システムの倫理” や “国家権力の構造” とも響き合う。

4. 未知の物体「スピラミン」の存在が生むミステリー

ドラマの中心には、火星に突如現れた “未知の物体” がある。

- 誰が作ったのか、なぜここにあるのか、人類にとって希望か、災厄かという問い合わせが、登場人物の運命を絡めながら徐々に明らかになっていく構造は “歴史事件の謎” や “国家と科学の暗部” に通じる魅力がある。

5. 音楽の存在感

L が音楽好きという設定もあり、劇中の音の扱いが物語と深く結びついている。

評価：★★★☆☆